ホリスティック・マネジメントの哲学探究

―クリシュナムルティの思想に依拠して―（１）

A Philosophy of Holistic Management (1)

石　井　　薫

（Kaoru Ishii）

『経 営 論 集』77 号（2011年3月）抜 刷

ホリスティック・マネジメントの哲学探究

―クリシュナムルティの思想に依拠して―（１）

A Philosophy of Holistic Management (1)

石　井　　薫

はじめに　―地球環境時代におけるマネジメントと哲学の共進化に向けて―
１　“マネジメントの哲学”と“哲学のマネジメント”
２　ホリスティック・マネジメントと哲学実践
３　ホリスティック・マネジメントの哲学を示唆するクリシュナムルティの思想
３．１　人類存続の鍵となるクリシュナムルティの思想
３．２　“超私自由”（私を超えて自由になること）
３．３　私は人類そのもので、私たちは一体
―平和は個人の内面の平和から―
３．４　教育のあり方
結びに

はじめに　―地球環境時代におけるマネジメントと哲学の共進化に向けて―

マネジメントとは、組織が環境に適応して持続できるように、人、モノ、カネ、情報、システムなどを調整することである。マネジメントは企業などの組織だけでなく、地球のマネジメントや自己の心身のマネジメント、意識のマネジメントなど、幅広いコンセプトである。さらにマネジメントは実践そのものであり、組織のあり方や、地球や宇宙のあり方に対する私たちの生き方の実践につながる。だから哲学もマネジメントも私たちの生き方の実践そのものであり、哲学とマネジメントは硬貨の表裏のように一体のものなのである。21世紀の哲学は、私たちの生き方の実践のなかにあり、私たちの意識のマネジメントの実践のなかにあるといえよう。本論では、真理も自由も愛も平和もすべて、私たちの生き方の哲学の実践のなかにあり、また私たちの意識のマネジメントの実践のなかにあることを明らかにしたい。

１　“マネジメントの哲学”と“哲学のマネジメント”

地球環境時代における哲学やマネジメントのあり方を考えるに際しては、環境マネジメントや環境監査に対する理解が必要であろう。私はこれ迄『環境マネジメント』（石井、2003）や『環境監査』、（石井、2006a）の研究成果を発表してきた。それから意識マネジメントとスピリチュアル・マネジメントを視野に入れて、環境マネジメントからホリスティック・マネジメントへの展開を提示した（石井、2005a、2008a・b)。さらに、スーパーISO とホリスティック・マネジメントを視座にして、環境監査と環境マネジメントの統合を試みた（石井、2009b、2010)。そこで、それらを踏まえて、以下では ISO の業務や環境マネジメントシステム規格（ISO14001）などに触れた

後、マネジメントと哲学の関わりについてみてみよう。

ISO の業務に関して、『国際標準化機構（ISO）』と題する著作では、「品質マネジメント、環境マネジメント、組織の社会的責任の基準を設定する ISO の役割が増大するにつれて、ISO はグローバルなガバナンスの一翼を担うものとして注目されるようになった・・・。と同時に、自発的な合意に基づく基準設定という ISO の当初の役割が減少」してきており、「ISO の業務はグローバルな産業経済のガバナンスにとって必須となっている」といわれる（Murphy & Yates, 2009, p. 107）。

さらに ISO などの基準だけでなく、今後は、国際的な倫理マネジメントシステムの基準と監査に関して、イギリスの SIGMA 基準の動向などにも眼を向ける必要がある。つまり「イギリスの SIGMA（Sustainability：Integrated Guidelines for Management）基準は、統合されたシステムを構築するために現行の基準に関する研究からスタートする。それは現行の最善の慣行とサスティナビリティ・マネジメントへの新しいアプローチを統合することを望んでいる。ここでのサスティナビリティは、自然環境に関連するだけでなく、社会的側面や経済的側面も含んでいる。SIGMA の規範的な基礎は、次のように学際的なアプローチを示している。すなわち、ISO14001は、ISO9001（品質）、SA8000（社会責任）、AA1000（アカウンタビリティ）、OHSAS1800 1（労働安全衛生）等の間の 1 つの基準にすぎない」（Wieland, 2003, p. 248）からである。

上記の著作の序文では、このような領域で中核となるのが、サスティナビリティの概念であると、次のように指摘されている。「国際的な領域では、倫理マネジメントシステム（EMS）、倫理プログラム、ヴァリュープログラム、倫理監査それに社会監査のような用語が、これらのマネジメントシステムを指示するために用いられる。この文脈で、ヨーロッパの視点では、コーポレイトガバナンス（例えばリスクマネジメント、コンプライアンス）、品質マネジメント（例えば、人的資本、サプライチェーン）、それに企業市民（人権、エコロジー、社会的責任、コミュニティ）を、包括的で首尾一貫した経営意思決定システムにヴァリュー志向で統合することから生ずるように思われる。これらの領域で核となる価値や共通の特徴はサスティナビリティである」（Wieland, 2003, p. ｖ）。

サスティナビリティが地球環境時代の哲学とマネジメントに密接に関わることは、たとえば次の著作（Norton, 2005）のタイトル『サスティナビリティー適応可能なエコマネジメントシステムの哲学』からも明らかである。そこでは、「本書の目的は、環境政策や環境マネジメントの哲学の多くの要素を統合することにある。・・・私は、学際研究への包括的なアプローチの展開と論証を試みた。すなわちコミュニケーションの問題に重点をおいて、クロスディシプリナリィで統合的なコミュニケーションをより良く展開するために、科学哲学や言語哲学の手法を援用するアプローチをとった」（Norton, 2005, pp. xvii～xviii）といわれる。しかしながら、本書は「エコマネジメントシステムの哲学」というサブタイトルがつけられているにもかかわらず、コミュニケーションに重点がおかれており、マネジメントの哲学に焦点をあてたものではない。

海外の議論の現状として、マネジメントと哲学のテーマで論じている文献もみられるが、周辺的な研究にとどまり、深く立ち入った研究はほとんどみうけられない。たとえば、マネジメントと哲学の関わりといっても、人的資源と経営哲学との関わりで

の議論にとどまっている。すなわち「インドの組織における HRD（Human Resouce Development）の実践とマネジメントの哲学」と題する論文の結論では、次のように述べられている。

「組織は人間の実存にセンシティブな経営哲学（managerial philosophy）を考案しなければならないだろう。組織における経営哲学は将来の組織に大きな影響を及ぼす。現代の経営哲学に一括される HR（human resources）の考え方は、職場を改革する可能性がある。最も重要なことは、人々がケアされたいし敬まわれたいと思っていることである。組織はコミットメントと統合を望んでいる。コミットされる人々と博愛的な組織の上手い結合が長期にみて便益があろう。このことは、組織が現代の経営哲学と共に HR を実践で採用しさえすれば可能となろう」（Singh, 2005, p. 78）。

またマネジメントと哲学の関わりを論じても、リーダーシップの哲学への展開に関心をもつ著作（Segal, 2004）もみられる。「マネジメントの科学からリーダーシップの哲学へ」というサブタイトルにみられるように、本書はマネジメントの科学からリーダーシップの哲学への展開を探究するものとされるが、「多くの企業のリーダーが、過去の期待にもとづいては新しい状況を評価できないと実感してはじめて、彼らの経営環境に希望や新しい可能性がでてくる。物事をみるこれ迄のやり方に疑問を投げかけることから希望が生ずる」（Segal, 2004, p. 53）と述べるにとどまる。

著作のタイトルでマネジメントの哲学とうたっても、中味はそうでないものもみられる。たとえば「マネジメント哲学」と題する著作（Kirkeby, 2000）においても、次のように序文で「本書は“マネジメントの哲学”でない。本書はリーダーシップの哲学といえる」と述べているほどである。すなわち「本書は、マネジメントに関する哲学的な論究である。本書はマネジメントと哲学の二つの領域の間を媒介する分野の構築をめざすものではない。逆に本書の目的は、哲学のみがマネジメントの内部の核心、すなわちリーダーシップを示すよう、マネジメントを変容しうることを明らかにすることにある。従って本書は“マネジメントの哲学”ではない。・・・本書はリーダーシップの哲学といえる」（Kirkeby, 2000, p. vii）と述べるだけでなく、マネジメントを“スピリチュアル”にさせたり、自己実現や自己マネジメントと関わらせる試みに共感しないとさえいうほどである。

それから、マネジメントと哲学に関して、『マネジメントの神話―現代のビジネスの哲学を暴露する』という著作（Stewart, 2009）があるが、本書で哲学というも、ビジネスに関わる考え方の意味程度で、学術的にマネジメントの哲学を論述したものではない。

上記以外にも、『マネジメントの哲学』（Sheldon, 2003）というタイトルの著作がみられる。本書の序文でタイトルに“哲学”（philosophy）という用語を使う理由を述べているが、それは深い哲学の知見というのでなく、ものの見方や考え方のレベルのように思われる（Sheldon, 2003, p. x）。そこでは哲学的な議論はみられず、「産業マネジメントの哲学」という小見出しで論じられているも、マネジメントが中心で、哲学の分野に関わる議論を展開しているわけではない。

このような状況のなかで、『マネジメントと組織の哲学の要素』と題する著作（Koslowski、2010）が、マネジメントと哲学の関わりに関して、比較的掘り下げた議

論を展開しているようにみうけられる。Koslowski は、その序文で、「人間の行為としてのマネージすることは、エピステモロジーにおける哲学と固有のつながりを有している。マネジメントのエピステモロジーは、企業をマネージすることやマネジメント業務にマネジメント理論を用いることに関する知識を創り出す能力を経営者はいかに改善しうるかという問いに関わる。経営倫理は経営者の正しい行為が何であるかという問いを研究し、マネジメントの文化理論は、企業文化が企業内の協働をいかに増大させるか、また文化的製品剰余価値がいかに企業の価値創造を増大させるかを検討する」と述べている。

本書の第１章「マネジメントの哲学―ビジネスへのチャレンジとしての哲学と哲学へのチャレンジとしてのマネジメント」の冒頭で、Koslowski は、次のように述べている。「異分野の専門家の間での新分野の探求は、当該二つの分野のまさに境界に関すること以上に、二つの分野の寄与を統合したものとなろう。統合された新しい分野は、統合された二つの分野のそれぞれの知識を活用することで、両方の分野にとって実りあるものとなろう。同じことが、マネジメントの哲学にも妥当する。展開されるべき分野としてのマネジメントの哲学は、両方の知識体系からの洞察を得ることで、両方の分野にとって有用となろう。・・・哲学とマネジメントの理論が統合されるためには、哲学とマネジメントが共通の何かを有していなければならない。マネジメントにおいて、哲学的な何かがあり、哲学においてマネジメント的な何かがあるにちがいない」（Koslowski, 2010, pp. 3～4）。

それから、第2章「マネジメントの哲学」の最後で、Rendtorff は、「マネジメントの哲学の理論と概念に関するこれらの要素は、企業市民、CSR、企業倫理、それにデンマークにおける価値志向のマネジメントの出現の重要性の文脈を知るのに役立つであろう」（Koslowski, 2010, p. 44）と結論づけている。

その他、「マネジメントの領域における教育の考え方の基礎としてのマネジメントの哲学」という研究（Kagirov, 2008）があり、ここでは、次のようにホリスティック・アプローチの重要性が強調されている。「本論文の目的は、“マネジメント”の職業専門家を養成するための哲学的・理論的基礎として、マネジメントの哲学の役割を示すことにある。現代のマネジメントに関する知識では、部分的なアプローチが支配的である。しかしながら、教育や実務においては、マネジメントへのホリスティックな（全体的、完全な）アプローチに転回することが必要である。それが私たちがマネジメントの哲学に関する伝統と現代の進展に向かうべき理由である。筆者は、現代のマネジメントの理論においては、部分的なアプローチが支配的となっているが故に、ロシアの教育にとってマネジメントの哲学のような課程が重要であることを実証する。」

しかし、上記の論文でいう“ホリスティック”は、トータルと同じ意味で使用されているに過ぎない。ホリスティックという場合には、外面と内面の両面を含む必要がある。しかしながら海外の議論で、ホリスティック・マネジメントという用語が使用される場合、ほとんどすべて外面だけで、トータルと同じ位の意味であることを、私は別稿で明らかにした（石井、2008a、43～45頁）。

そこで次に、外面と内面を含む“ホリスティック”なマネジメントと哲学の関わりについて論じることにしよう。

２　ホリスティック・マネジメントと哲学実践

今日の危機を人類が乗り超えられるかどうかは、人類が見える世界のカベを超えて、見えない世界に立ち入れるか、そして見える世界と見えない世界を統合したホリスティック・マネジメントが実践できるかどうかにかかっている（石井、2008d）。それゆえ以下では、人類が見える世界のカベを超えて、見えない世界に辿り着くための“哲学実践”について論じたい。

これ迄人類は、学問の諸分野も実践の諸分野も、外面にばかり目を向けていた。科学や哲学など知の分野も、医療や教育、それにマネジメントなどの実践の分野においても、外面に目を奪われていた。たとえばマネジメントの分野においては、人、モノ、カネ、情報などの外面的なマネジメントに焦点があてられている。マネジメントの分野に比べて、教育の分野では、近年ホリスティック教育の領域で内面に踏み込む努力が見られる。一方医療の分野では、先進的なホリスティック医療の領域で、かなり内面に立ち入った議論が展開されている。

ただ今後は、医療、教育、それにマネジメントなど理論と実践のあらゆる分野で、全体として内面に焦点をあてた見方をしていくことが大切と思われる。つまり内面の変革によって、結果的に外面が変わっていくという見方や哲学で実践していくのである。

ここで“哲学”ではなく、“哲学実践”という新しいコンセプトを提示したい。私たちは長い知の歴史のなかで、理論と実践の区別のように、分離の思考を常識として強固にしてきた。しかし理論と実践を分離して考えるのでなく、理論と実践を統合して一体とみることが重要と思われる。これは、感じたり、思考したり、実践したりすることが、別のことのように分離するのでなく、感じること、思考すること、実践することは、切り離せない同一の現象とみなすのである（このような見方は、クリシュナムルティ［Krishnamurti, 1991a, 訳書220～221頁］に依拠している）。哲学に関しても、理論だけでなく理論と実践を統合した一つの現象とみるのである。そのような哲学の見方を“哲学実践”として、21世紀の新しい哲学の道標としたい。

20世紀の哲学は、言語論的転回という流れで、言語哲学が主流であった。そこでは哲学は言語や科学などの強い影響を受け、外面の分析が支配的であった。また地球環境問題もそれほど表面化していなかったこともあり、地球環境の危機的状況に応えるような哲学は、ほとんどみられなかった。唯一の例外は、意外に知られていないが、スコリモフスキーで、『エコフィロソフィー21世紀文明哲学の創造―』（Skolimowski、1992）は、20世紀の哲学と21世紀の哲学の架橋となるものとして、高く評価される（石井、2003）。

そして21世紀の今、私たちは、外面レベルの理論と実践の統合のみならず、内面にも眼を向け、外面と内面を統合する時機に来ている。ここで意識やスピリチュアルな領域の内面と外面を統合することこそ、まさに“ホリスティック・マネジメント”に他ならない。

医療や教育というのは、理論と実践が融合しやすい領域であり、また外面と内面の関わりが比較的理解されやすいところから、ホリスティック医療やホリスティック教

育として展開されているように思われる。同様にマネジメントも理論と実践が統合しやすい素地があるので、今後内面に眼を向けることにより、ホリスティック経営、さらにホリスティック・マネジメントとして重要な役割を果たすコンセプトとなろう。すなわちマネジメントは、理論と実践の統合のみならず、ホリスティック・マネジメントとして、ホリスティック医療、ホリスティック教育、それにホリスティック経営など、あらゆる分野を外面と内面で統合することを可能とするコンセプトだからである。そしてそのようなホリスティック・マネジメントは、今日の統合の時代の理念かつ実践であり、内面にも関与する“哲学実践”そのものと見なされる。今日の人類の危機的状況を乗り超えるために、私たちが愛溢れるホリスティック・マネジメントを実践することは、愛溢れる哲学実践を行うことでもあり、愛溢れる生き方で共に究極的に自由の境地をめざして生きることに他ならないのである。

私たちは、絶えず変化する多次元多様な世界に身を置いている。私たちは、自分の置かれた場から、世界の一部を刈り取って、それぞれの世界をつくっている。美しい自然、温かい人間関係、些細なトラブル、戦争や災害、病気やストレス、生活不安等々、種々様々の出来事によって、それぞれの世界が幻影のように繰り広げられる。私たちは、自分が置かれた場から、小さな視野で身の回りの外面をみて、あれこれ一喜一憂している。そして私たちは、時間の呪縛のなかで、安全な生活をもとめて、モノやお金や知識を所有し蓄積する歴史を歩んできた。そして将来に希望の光を見い出せないまま、今日の人類の危機を迎えているのが現状である。

このような状況をみると、科学や言語など分離を強化する、これ迄のような人類の歩みの延長線上では、破局に至るのも自明のことのように思われる。私たちは同じ世界を生きながら、それぞれ外面の世界のごく一部だけをみているため、互いに異なった世界観をもち、それが分離した価値観をもたらし、さらに対立や争いを生んでいる。そこで、先ず私たちは、外面に向かうのではなく、内面をみることに転換したい。人々が内面をみることによって、それぞれの世界観は、内奥の深いところで一つのものに収斂していく可能性がある。私たちは眼の外の世界でなく、眼の内奥に向かうことにより、それぞれ万物は一つであるとの統合した世界観を共有する道が拓ける。つまり外面から内面への視線の転換によって、はじめて世界の分離から世界の統合へとチェンジ（変革）することができるのである。

全的な意識改革のために、外面だけでなく内面もみることは、自己の意識マネジメントの実践からスタートできよう。そのような意識マネジメントの具体的な手法として、私は各種のスーパーISO を考案した。家庭＆社会版スーパーISO（石井2005b）、地球＆宇宙版スーパーISO（石井、2005c）、それに学生版＆コミュニティ版スーパーISO（石井、2005d、2006a・b）などである（石井薫のホームページ参照）。そして、地球マネジメント学会第15回大会で、今日の地球環境の危機的状況に人類が対応するために、次のような「人類版スーパーISO」（石井、2008c）の実践を提案した。

■　人類版スーパー ISO の実践指針　―自己診断チェック・リスト―

1　愛の宣言

（1）愛溢れる“私”になることを宣言する

2　見える世界のカベを超えて、見えない世界へ　―外面から内面へ―
（2）科学のカベを超える　―複雑系から神秘系へ―
（3）環境のカベを超える　―環境マネジメントから意識マネジメントへ―
（4）人間のカベを超える　―みえる身体からスピリチュアルな存在へ―
3　万物を統合するホリスティック・マネジメントへ
（5）医療・教育・経営等の実践を統合するホリスティック・マネジメントへ
（6）科学・哲学・秘学等の知を統合するホリスティック・マネジメントへ
（7）スピリチュアル・マネジメントを含むホリスティック・マネジメントへ
4　時空を超えて、意識の世界から愛の世界へ
（8）“神”と向きあい、神と私の一体から万物一体へ
（9）人生と向きあい、「生きるとは愛すること」を学ぶ
(10) 愛溢れる人類のコミュニティづくりを実践する

上記のような人類版スーパーISO によって、私たちは愛溢れる存在として、外面と内面を統合して生きることが可能となろう。それが愛溢れるホリスティック・マネジメントに導き、私たちの社会のシステムを愛溢れるものにチェンジしていくであろう。21世紀の今、統合の時代の哲学実践として、愛溢れるホリスティック・マネジメントと人類版スーパーISO が、私達人類の進路にとって、一つの道標となるのではないだろうか。

3　ホリスティック・マネジメントの哲学を示唆するクリシュナムルティの思想

3．1　人類存続の鍵となるクリシュナムルティの思想

前節では、人類が見える世界のカベを超えて、見えない世界に辿り着くための「統合の時代の“哲学実践”」（石井、2009a）として、人類版スーパーISO の実践指針を提言した。

そこで本節では、今日の人類の危機を乗り超えるために、私たちは究極的なジャンプ（意識の次元上昇）が必要であり、それを私の造語“超私自由”（私を超えて自由になること）というコンセプトで明らかにしよう。

私はこれ迄、「秘学に向きあう時(1)～(7)」と題して、ケン・ウィルバー、クリシュナムルティ、パウエル、アリス・ベイリー、ベンジャミン・クレーム、ウォルシュ、ラズロ、パラマハンサ・ヨガナンダなどの思想を紹介してきた（『地球マネジメント学会通信』第63～67、83～84号参照）。それぞれ諸説は貴重なメッセージを私たちに伝えているが、なかでもクリシュナムルティの思想は、最も奥が深く、究極的な意識のチェンジ（変革）を私たちに突きつけているように思われる。それは私がこれ迄学んできたものと重なるところもあれば、それを大きく突き崩すものもある。

本論で述べることのなかには、理解しがたいものや容易に受け入れがたいものがあるかもしれない。しかし大事なことは、どんな考えでも無条件に受け入れたり、無条件に拒否したりするのでなく、自分自身で考え、そして自分が意識的にまた無意識的に条件づけられているものに気づき、その条件づけから自由になることである。その

ためには、私たちは全てにおいて答えを求めるのでなく、疑問を持つことが大切である。クリシュナムルティは「あなたの信念を大切にするのではなく、疑うこと」（Krishnamurti, 1991a, 訳書406頁）を説いている。それは、問題にはそもそもどんな答えもなく（Krishnamurti, 1991b, 訳書264頁）、「何が真実であるのかは、疑いを通し、多くの幻影、伝統的価値、理想を問うことを通してだけ開示される」（Krishnamurti, 1991a, 訳書420頁）からである。

クリシュナムルティの思想は、私たちがこれ迄あたり前だと思っていることを根底から揺り動かすもので、私たちを条件づけているものをことごとく粉砕し、私達を自由の境地に連れていく。と言っても、クリシュナムルティは、私たちをどこかに導くことを意図していないし、私自身もクリシュナムルティを信奉しているわけではないことを、誤解のないように記しておきたい。クリシュナムルティが「私は宗教的組織を信じていないし、また私はただの一人をも導きたくない・・・私は、どんな人をも特定の目標や目的に向けて駆り立てたくありません」（Krishnamurti, 1991a, 訳書497頁）というように、誰かを導いたり、誰かを信奉することは、クリシュナムルティの最も嫌うところであろう。

以下の議論を読み進めるにつれ、自分の信条や信念を否定されるようなことで、拒否反応がでてくる向きがあるかもしれない。しかし、自分が信じていることが、本当に正しいのかどうかを問い直す材料として、クリシュナムルティの思想に向きあうことが大切である。どちらが正しいとか間違っているかということでなく、私たちが意識的また無意識的な条件づけから自由になることこそ、人類の危機を救う究極のジャンプ（アセンション）になるからである。

３．２“超私自由”（私を超えて自由になること）

私はこれ迄“愛溢れる私”になることを宣言して、愛のエネルギーを活用することにより、愛溢れる社会、愛溢れる地球への変容をめざす方策について研究してきた。そのようなプロセスのなかで、ウォルシュに拠り、愛と神と自由という言葉は置換え可能と述べたり、シュタイナーの自由の哲学などを引用して、自由の概念の重要性について言及してきた。本論ではクリシュナムルティに依拠し、自由に関する新たな議論を展開しよう。それは愛溢れる平和な地球を実現するには、クリシュナムルティがいうように、私たちは真に自由でなければならないと思われるからである。

真に自由であるためには、私たちはあらゆる条件づけから自由でなければならない。私は、モノやお金や権力、それに言語や記号、さらに時間など、いわば“万有権力”を超える必要を強調してきた（石井、2003）。しかしクリシュナムルティは、知識や科学や宗教などの条件づけから自由になるだけでなく、信念や習慣や伝統等の条件づけから自由になること、さらに時間や意識の条件づけを超えること、それとともに“私”の条件づけを超えることを、次のように教示している。私たちの精神は、時間や意識、それに“私”に条件づけられており、そのように条件づけられた精神は怠慢になるという。すなわち、もしあなたが条件づけられ縛りつけられていれば、あなたの精神は（そのロープの半径内を歩き回るだけの）木につながれているロバのようなものという（Krishnamurti, 2007、訳書67頁）。このように精神が怠慢になるのは、私たちが指

導者、教師、救い主といった、あらゆる種類の外部の力に頼ってきたからで、「私たちは、自分自身を知らないがゆえに、他の人々を滅ぼし、この素晴らしい地球を破壊している」と述べている（Krishnamurti, 2007, 訳書123頁）。

私たちの一人ひとりが全的に問題を見つめるのを妨害しているのは「私」の状態である精神であるという（Krishnamurti, 1991b, 29頁）。ここで自由というのは、何かからの自由でなく（何かからの自由は、ただ反応だけで、それは自由ではない）、それ自体で自由であるという（Krishnamurti, 1991b, 訳書108, 129頁）。

時間を超え、意識を超え、そして“私”を超えて自由になることという、クリシュナムルティの思想は、理解され難いかもしれないが、私には比類なきもの、また究極的なもののように思われる。クリシュナムルティは、人間における全的革命、すなわち思考の変化、観念の変化、道徳の変化などだけではなく、完全な無意識的な革命が必要としている。なぜなら意識的な革命は、やはり意識に条件づけられていて制限されているからという（Krishnamurti, 1991b, 訳書11頁）。つまり全的革命は無意識的でなければならないというのは、意志は欲望・願望であって、やはり「私」の意志に他ならないからである（Krishnamurti, 1991b, 訳書98頁）。このような見方は、未だ誰も唱えたことなく容易に理解し難いが、伝来の思考の枠組みを突き崩す、まさに究極的なレベルの洞察と思われる。

３．３　私は人類そのもので、私たちは一体　―平和は個人の内面の平和から―

今日の人類の危機的状況において、人類全体のための組織的な計画の欠如がみられるが、それは階級差別、国家的・民族的区別、宗教的・党派的区別などが、知恵ある協力を妨げているからと、クリシュナムルティはいう。私の国、私の家族、私自身が第一という国家主義・民族主義を通しては、決して人間の統合、世界の統合はできないという（Krishnamurti、1991a, 訳書411頁）。人類の全体のための完全な人間的行動は、国家、階級、宗教という見地を離れてのみ可能となる（Krishnamurti, 1991a, 訳書416頁）。だから戦争を防止する唯一のものは、「私の神、私の国、私の家族、私の家」というこの病気から、自由になることであるという（Krishnamurti, 1991a, 訳書469頁）。

クリシュナムルティは、私が他の人と同じく人類であることに気づくべき時で、人類は「私」なのであると、次のように述べている。「人は限定され、抑制された、偏狭な個人として生きてきたので、自分も他の人々と同じく人類であるという真理を理解するのが非常に困難なのです。あなたの中に人間の全体があるのです。つまり、あなたは一人の人間として世界の部分なのです。あなたは世界なのです。それは観念でも、理性によって知的にまとめあげられ、ええ、その通りですと言って同意されるべき何かでもないのです。あなたが一人の人間として全人類を代表しているというのは、正真正銘の真実なのです。あなたは苦しみ、心配し、不確かで、混乱し、惨めで、怯え、傷つきます。そして、あらゆる人間はこういったすべてを抱えているのです。ですから、あなたの意識は人類の意識なのです」（Krishnamurti、2007、訳書25、37、51頁）。

クリシュナムルティは、「君のお父さんとお母さんが誕生させたから、君は存在するのです。そして君は幾世紀もの人間の結果、・・・世界中の人間の結果で、・・・世

界全体の結果です」（Krishnamurti, 1991b, 訳書249頁）とも述べている。私たちは皆、何百万年もの進化を経てきた大人であり（Krishnamurti、2007、訳書39頁）、また私たちは全員が基本的に一体なので、「結局、生は一体のものであり、グローバルな一つの運動なのです。同様にして、私たちの意識は全人類のそれと共通なのです。ですから、もし私が根本的に変われば、確実にそれは他の全員の意識に影響を及ぼす」（Krishnamurti、2007、訳書41、43頁）ことになるのである。

私は人類そのものなので、私が変われば人類の意識に影響を及ぼすからこそ、また「危機は国家、経済、そして社会の中にあると私たちは考えるのですが、実は私たちの内部にあるのです。危機は外部にあるのではなく、まさに内部にある」（Krishnamurti、2007、訳書27、75頁）からこそ、個人の内面の変革が重要となるのである。

要するに、「世界全体はあなたと私から異なっているわけではありません。根本的な変革をもたらすのは、個人です。他の人たちとは生き方の異なったわずかな個人たちが、どのように社会に変化をなしとげたのかを、歴史は示しています。私たちが個人として、深く根源的に自分たち自身を変革しないのなら、この世界に平和と平穏があるどんな可能性も、私には見えない（Krishnamurti, 1991b, 訳書407頁）」ということになる。それと「平和を手に入れるためには、人は平和的な手段を用いなければならない。なぜなら、もしも手段が暴力的なものであれば、いかにして目的が平和的でありうるだろう？　もしも目的が自由なら、始まりもまた自由でなければならない。なぜなら、目的と始まりは一体だからである。まず最初に自由がある時にのみ、自己知と英知がありうる。そして自由は権威の受け入れによって拒まれる」（Krishnamurti、1995、訳書56頁）ことや、「われわれの責任を理解するには、単なる学識や知識ではなく、われわれの心の中に愛がなければならない」（Krishnamurti、1995、訳書77頁）ことにも留意する必要があろう。私もこれ迄、“心に愛の花を咲かせる”ことを強調してきたので、クリシュナムルティの言葉に心底共感している。

３．４　教育のあり方

クリシュナムルティは、現在の教育体制などに対して「現在の危機の他の原因は、日常生活においてであれ、小さな学校においてであれ、大学においてであれ、権威、指導者への依存である。指導者たちと彼らの権威は、どの文化内でも事態を悪化させる要因である。われわれが他の人に従う時、そこにはいかなる理解もなく、あるのは恐怖と適合・順応だけで、結局は全体主義国家の冷酷さや組織宗教の独断主義に行き着く」（Krishnamurti、1995、訳書65頁）と批判している。そして、「正しい教育は、もしもわれわれが身近のものから始め、もしもわれわれが自分の子供たち、友人あるいは隣人たちと自分との関係において自分自身に気づくようにすれば、広く行なわれるようになるだろう。われわれが住んでいる世界、われわれの家族や友人たちの世界の中でのわれわれ自身の行動は、波紋が広がるように着実に影響を及ぼしていくだろう」（Krishnamurti、1995、訳書84頁）と述べている。これは、前述したように、私が考案した意識マネジメントの手法である「スーパーISO」のめざすものと重なる。

それはともかく、クリシュナムルティは、「すべての権威は障害であり、従って教育者が生徒にとっての権威にならないようにすることがきわめて重要である」という

（Krishnamurti、1995、訳書109頁）。そして、「教師の真の機能は、啓発者であることではなく、手本であることでもなく、子どもに知恵を目覚めさせること」であり、「そこで学生が恐れなく成長して結実するであろうところの雰囲気、環境を、創造すること」なのだといわれる（Krishnamurti、1991b, 訳書35、37頁）。

私たちが「知識に溺れている専門家になるだけのために教育されているのなら、われわれは世界の破壊と不幸に手を貸してしまうであろう」として、クリシュナムルティは、「人生にはより高くかつ広い意義が確かにあるというのに、もしわれわれが決してそれを発見しないなら、われわれの教育にどんな価値があるというのだろう？われわれは高度な教育を受けるかもしれないが、もし思考と感情の深い統合が遂げられなければ、われわれの人生は不完全で、矛盾し、多くの恐怖でずたずたに引き裂かれてしまうだろう。そして教育が統合した人生観を培わないかぎり、それはほとんど意義を持たないのである」（Krishnamurti、1995、訳書3頁）と述べている。すなわち、教育とは単に知識を身につけるだけでなく、人生の全体としての意義を見極めることであり、「教育の役割は統合した、それゆえ英知豊かな人間存在を生み出すことである」という（Krishnamurti、1995、訳書7頁）。

クリシュナムルティは、正しい教育は教師から始まるので、教師が正しく教育されていなかったら彼は何を教えることができるかと問いかけ、「問題はそれゆえ子供ではなく、親と教師である。問題は教育者を教育すること」なのであり、「われわれ自身の再教育に関心を持つことの方が、子供の将来の福祉や安全を心配することよりもずっと必要なのである」と指摘している（Krishnamurti、1995、訳書99頁）。このクリシュナムルティの指摘は、環境教育などにも妥当するもので、まさにその通りだと共感するばかりである。

結びに

クリシュナムルティの思想をみてきたが、上述のクリシュナムルティの言葉の数々は、受け入れられるものの他、理解し難いものや、違和感を覚えるもの、それに拒絶したくなるものなど、様々に受けとめられるように思われる。そこで、クリシュナムルティのいうことを無条件に受け入れるのではなく、また無条件に拒絶すべきでもないということを再度強調しておきたい。クリシュナムルティのいうことに疑問を持つと同時に、クリシュナムルティのいうことを拒絶させる自分の信念に対しても、疑問を持つことが大切である。私たちは、クリシュナムルティが語るように、意識的にまた無意識的にロープでつながれたロバのように、信念などに縛りつけられ自由を失い、それらの奴隷になっている。私たちを条件づけ縛りつけているものから、自分自身を解き放つために、クリシュナムルティのメッセージは、人類への究極の贈り物と受けとめたい。

クリシュナムルティは、科学や宗教、理想や習慣、努力や伝統など私たちが良しとしている諸々のすべてを否定しているというよりも、それらの良し悪しを議論しても無意味であることを説いているように思われる。善悪や真偽など、二項対立するものはすべて、この世界の次元で争いや葛藤を際限なく生み出すことになる。理想、習慣、努力、それに進歩などにしても、それぞれ一方向のみで、必ず対極との間に軋轢が生

まれることになる。私たちは自分の国、自分の組織、自分の家族、それに自分自身のために、生活などの安全をもとめるが、求めれば必ず不安を伴うことになる。これらは同じ次元における対極のなかで揺り動かされるからである。

このような対立や争いを克服する途は、対極のある次元を超えることである。愛や神、それに自由には対極がない。本来の愛や神や自由には対極がなく、それぞれ、それ自体が愛であり、神であり、自由であるといえよう。私見では、愛も、神も自由も分離できない一体のものであり、真理の一瞬のきらめきのそれぞれが、愛であり、神であり、自由であるといえるように思われる。このようにみると、今日の人類の危機的状況を乗り超えるには、私たちがあらゆる条件づけを超える次元に上昇することがもとめられる。私たちは人類そのもので一体だということに気づくこと、とりわけ時間を超え、意識を超え、そして私を超えて自由になること（“超私自由”）こそが、人類存続の鍵と思われてならない。

【参考文献】

Kagirov, B. N. (2008) “Philosophy of Management as a Conceptual Foundation of Education in the Sphere of Management,” *Philosophy of Education*, No.3, pp.225-231.

Kirkeby, Ole Fogh (2000) *Management Philosophy : A Radical-Normative Perspective*, SPRINGER, BERLIN.

Koslowski, P. (ed.) (2010) *Elements of a Philosophy of Management and Organization*, Springer .

Krishnamurti, J. (1991a) *The Collected Works of J. Krishnamurti*, *Volume 1*, *1933-1934* (クリシュナムルティ、J.、横山信英・藤仲孝司訳『花のように生きる一生の完全性（クリシュナムルティ著述集第１巻1933－1934）』UNIO 発行、（株）星雲社、2005年）。

Krishnamurti, J. (1991b) *The Collected Works of J. Krishnamurti*、*Vol8*、*1953-1955* (クリシュナムルティ、J.、藤仲孝司・横山信英・三木治子訳『知恵からの創造一条件付けの教育を超えて（クリシュナムルティ著述集第8巻1953－1955、Part1）』UNIO 発行、（株）星雲社、2007年）。

Krishnamurti, J. (1955) *Education and the Significance of Life* （クリシュナムルティ、J.、大野純一訳『クリシュナムルティの教育原論―心の砂漠化を防ぐために』（有）コスモス・ライブラリー発行、（株）星雲社、2007年）。

Krishnamurti, J. (2007) *Challenge of Change*, Krishnamurti Foundation of America（クリシュナムルティ、J.、柳川晃緒訳・大野純一監訳『変化への挑戦：クリシュナムルティの生涯と教え』（有）コスモス・ライブラリー発行、（株）星雲社、2008年）。

Murphy, C. N. and J. Yates (2009) *The International Organization for Standardization* (*ISO*), Routledge.

Norton, Bryan G. (2005) Sustainability : *A Philosophy of Adaptive Ecosystem Management*, Univ. of Chicago Pr.

Segal, Steven (2004) *Business Feel* : *From the Science of Management to the Philosophy of Leadership*, Palgrave Macmillan .

Skolimowski, Henryk (1992) *Living Philosophy* : *Eco-Philosophy as a Tree of Life*, Arkana （ス

コリモフスキー、ヘンリック、間瀬啓允・矢嶋直規訳『エコフィロソフィー21世紀文明哲学の創造―』宝蔵館、1999年)。

Stewart, Matthew（2009）*The Management Myth* : *Debunking Modern Business Philosophy*（Reprint）, W. W. Norton & Co Inc .

Sheldon, Oliver（2003）*The Philosophy of Management* ; *Early Sociology of Management and Organizations* ,VolumeⅡ（Reprint）、Routledge .

Singh, Anil Kumar（2005）"HRD Practices and Philosophy of Management in Indian Organizations," *VIKALPA*, Vol.30, No.2, pp.71-79.

Wieland, J.（2003）*Standards and Audits for Ethics Management Systems* : *The European Perspective*（Studies in Economic Ethics and Philosophy）, SPRINGER, BERLIN .

石井薫（2003）『環境マネジメント―地球環境時代を生きる哲学―』創成社。

石井薫（2005a）「環境マネジメントからホリスティック・マネジメントへの展開―社会マネジメント・環境マネジメント・意識マネジメント―（１）」『経営力創成研究』（東洋大学）創刊号。

石井薫（2005b）『「環境マネジメント入門」講義の現場報告』創成社。

石井薫（2005c）『「環境マネジメント」講義の現場報告』創成社。

石井薫（2005d）『「環境監査論」講義の現場報告』創成社。

石井薫（2006a）『環境監査―自治体版・企業版・家庭版・学校版スーパーISO と自己宣言（第３版）』創成社。

石井薫（2006b）『公共監査論』創成社。

石井薫（2008a）「環境マネジメントからホリスティック・マネジメントへの展開―社会マネジメント・環境マネジメント・意識マネジメント―（２）」『経営力創成研究』（東洋大学）第４号。

石井薫（2008b）「意識マネジメントとスピリチュアル・マネジメント―環境マネジメントからホリスティック・マネジメントへの架橋―」『経営論集』（東洋大学経営学部）第71号。

石井薫（2008c）「今、神と人生とどう向きあうかを哲学する―愛溢れる私と地球と宇宙のホリスティック・マネジメント―」『地球マネジメント学会通信』第81号。

石井薫（2008d）「分離の時代から統合の時代への変革」『地球マネジメント学会通信』第84号。

石井薫（2009a）「統合の時代の哲学実践―ホリスティック・マネジメントとスーパーISO」『地球マネジメント学会通信』第85号。

石井薫（2009b）「環境監査と環境マネジメントの統合に向けての研究　―スーパーISO とホリスティック・マネジメントを視座として―（１）」『経営論集』（東洋大学経営学部）第73号。

石井薫（2010）「環境監査と環境マネジメントの統合に向けての研究　―スーパーISO とホリスティック・マネジメントを視座として―（２）」『経営論集』（東洋大学経営学部）第75号。

石井薫のホームページ：http://homepage3.nifty.com/ishii2004/

（2010年12月20日受理）